ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団
ニューイヤー・コンサート Warsaw Philharmonic Orchestra New Year Concert

2018年1月15日（月）19:00開演 サントリーホール
19:00, Mon. 15 January 2018 at Suntory Hall

PROGRAM

パデレフスキ：序曲 変ホ長調
I. J. Paderewski: Overture in E flat major for Orchestra

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11（ピアノ:ニコライ・ホジャイノフ）
F. Chopin: Piano Concerto Mo.1 in E minor Op.11 (Piano: Nikolay Khozyainov)

第1楽章：アレグロ・マエストーソ	1st Mov.: Allegro maestoso
第2楽章：ロマンツェ　ラルゲット	2nd Mov.: Romanze. Larghetto
第3楽章：ロンド　ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Rondo. Vivace

ドヴォルザーク：交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界より」
A. Dvořák: Symphony No.9 in E minor, Op.95, B.178, “From the New World”

第1楽章：アダージョ ― アレグロ・モルト	1st Mov.: Adagio - Allegro molto
第2楽章：ラルゴ	2nd Mov.: Largo
第3楽章：スケルツォ　モルト・ヴィヴァーチェ	3rd Mov.: Scherzo. Molto vivace
第4楽章：アレグロ・コン・フオーコ	4th Mov.: Allegro con fuoco

主催：JAPAN ARTS ジャパン・アーツ
後援：駐日ポーランド共和国大使館　ポーランド広報文化センター
協力：LOTポーランド航空　松尾楽器商会

この企画はポーランド独立回復100周年記念事業の一つとして実施されるものです。

2018年日本公演スケジュール

1月6日（土）	西　宮	兵庫県立芸術文化センター◆	主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター
1月8日（月・祝）	札　幌	札幌コンサートホール Kitara★	主催：オフィス・ワン
1月10日（水）	名古屋	日本特殊陶業市民会館フォレストホール◆	主催：中京テレビ
1月12日（金）	新　潟	新潟県民会館★☆	主催：TeNYテレビ新潟／（公財）新潟市芸術文化振興財団
1月13日（土）	福　島	福島市音楽堂★	主催：福島市音楽堂（（公財）福島市振興公社）・福島市教育委員会
1月14日（日）	盛　岡	盛岡市民文化ホール★	主催：盛岡市文化振興事業団、岩手日報社、岩手朝日テレビ
1月15日（月）	東　京	サントリーホール◇	主催：ジャパン・アーツ

ソリスト：　シャルル・リシャール・アムラン（ピアノ）◆　牛田智大（ピアノ）★　千住真理子（ヴァイオリン）☆　ニコライ・ホジャイノフ（ピアノ）◇

PROFILE

ヤツェク・カスプシック（音楽芸術監督）
Jacek Kaspszyk, Music & Artistic Director

©Maciej Zienkiewicz

1977年、カラヤン指揮者コンクールに入賞。以来、ニューヨーク・フィルハーモニック、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、ベルリン放送交響楽団、ウィーン交響楽団、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ヨーロッパ室内管弦楽団（オーストラリアへのツアーで共演）など、世界の主要オーケストラを指揮。イギリスではロンドンの主要オーケストラすべてと共演し、そのほかハレ管弦楽団、ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・スコティッシュ管弦楽団、エイジ・オブ・インライトゥンメント管弦楽団、BBCスコティッシュ交響楽団、BBCウェールズ交響楽団（BBCプロムスへのデビューで共演）などと共演。また、これまでに日本、韓国、中国、マレーシアのオーケストラも指揮している。

祖国ポーランドでも、ポーランド国立放送交響楽団の音楽監督、NFMヴロツワフ・フィルハーモニー管弦楽団の芸術監督など、数多くの要職を歴任。ポーランド国立歌劇場の音楽監督および芸術総監督の在任中には、同歌劇場を率いて北京音楽祭、モスクワのボリショイ劇場、ロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場、香港芸術祭に出演、さらに3回にわたる日本ツアーを行い、いずれも大成功を収めた。「オペラ・ナウ」誌の批評家は「ポーランド国立歌劇場は、ヨーロッパの地図上でベルリンとモスクワの間にあるギャップを埋めた」と述べた。

このほか、デュッセルドルフのライン・ドイツ・オペラ、パリのオペラ・コミック座、ストックホルムのスウェーデン王立歌劇場、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、スコティッシュ・オペラ、チューリッヒ歌劇場、ブエノス・アイレスのコロン劇場、そして直近ではニュルンベルク歌劇場など、多くの有名歌劇場での公演に携わっている。

2013年9月、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団の音楽芸術監督に就任。就任後間もなく、同楽団初となるインターネット配信用のコンサートの指揮や、ヴァインベルクの交響曲第4番の録音（ワーナー・クラシックス）を行った。なお、この録音は「フレデリック」賞にノミネートされた。録音ではそのほか、モニューシュコの歌劇「幽霊屋敷」（EMI）がプラチナ・ディスク賞を受賞し、シマノフスキの歌劇「ロジェ王」（CD Accord）がBBCミュージック・マガジン誌の「レコード・オブ・ザ・イヤー」にノミネート。ルガーノ・フェスティバル「マルタ・アルゲリッチ・プロジェクト」を収録したCD（EMI）はクラシック・チャート第2位にランク・インした。

カスプシックは多くの賞を受賞しており、近年ではエルガー協会メダル（エルガー作品の解釈に対して）、「コリュパイオス・オブ・ポーリッシュ・ミュージック」賞（「ワルシャワの秋」音楽祭での演奏会に対して）、ヴィボルチャ紙の「マン・オブ・ザ・イヤー」聴衆賞を受賞した。

ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団

Warsaw Philharmonic Orchestra

ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団は、1901年11月5日、新しく建設されたフィルハーモニー・ホールで、同楽団にとって最初の演奏会を行った。この旗揚げコンサートは、同楽団の創設にも関わった初代音楽監督で首席指揮者のエミル・ムイナルスキが指揮し、イグナツィ・ヤン・パデレフスキがソリストとして出演した。

第一次世界大戦以前から戦間期にかけて、同楽団はポーランド音楽界の中心的存在となり、ヨーロッパの主要な音楽団体のひとつとしての地位を確立した。第二次世界大戦でドイツ軍の爆撃によりフィルハーモニー・ホールが破壊されたため、戦後数年間の演奏会は劇場や体育館などで行われた。1955年2月21日、フィルハーモニー・ホール跡地に再建された新ホールが本拠地となり、同楽団には「国立フィルハーモニー」の地位が与えられた。こうして、新しい音楽監督ヴィトルド・ロヴィツキの下で、同楽団はポーランドを代表するオーケストラとしての名声を回復した。1955年から58年まではボフダン・ヴォディチコが芸術監督を務め、その後、ロヴィツキが再任し、1977年からはカジミエシュ・コルトが同職を務めた。2002年1月から2013年8月まではアントニ・ヴィトが芸術総監督を務めた。2013年9月1日からは、ヤツェク・カスプシックが同楽団の芸術監督を務めている。

現在ワルシャワ・フィルは世界中で人気を誇り、大好評を博している。同楽団はこれまでに140回以上のツアーを5大陸で行い、世界のすべての主要なコンサートホールで演奏している。また、ワルシャワのショパン国際ピアノコンクールと「ワルシャワの秋」音楽祭にも定期的に出演している。さらに、ポーランド・ラジオおよび国営テレビ（TVP）での収録や、ポーランド国内外のレコード・レーベルや映画会社での収録も行っている。ペンデレツキやシマノフスキの声楽と管弦楽のための作品などの録音により、権威あるレコード賞を数多く受賞。主なものに2013年のグラミー賞受賞があるが、グラミー賞には6回ノミネートされている。ほかに、ディアパソン・ドール賞、ICMA賞（国際クラシック音楽賞）、グラモフォン賞、「レコード芸術」誌のレコード・アカデミー賞、CIA賞（クラシカル・インターネット賞）、MIDEMクラシック賞、「フレデリック賞」（ポーランドのレコード・アカデミー賞）などがある。

2016年にはショパン国際ピアノコンクール2015の入賞者との共演による日本と韓国へのツアーと、チョ・ソンジンとの共演によるアメリカ・ツアーをヤツェク・カスプシックの指揮で行い、いずれも大好評を博した。2017年には、ユンディ・リを指揮者兼ソリストとして、中国の主要都市へのツアーを行った。

ニコライ・ホジャイノフ（ピアノ）

Nikolay Khozyainov, Piano

1992年、ロシア・ブラゴヴェシェンスク生まれ。5歳でピアノを始める。モスクワ音楽院にてユーリー・リシチェンコ、ミハイル・ヴォスクレセンスキーに師事。現在はハノーファー音楽大学でアリエ・ヴァルディ教授のもと、上級学位の取得を目指している。

これまでに、2003年ピアノ・ヴィルトゥオーゾ国際コンクール（チェコ）優勝および特別賞、2004年第9回カルル・フィルチ国際ピアノコンクール（ルーマニア）優勝、2008年スクリャービン国際ピアノコンクール（パリ）優勝、若い音楽家のための第6回ショパン国際ピアノコンクール（モスクワ）第2位および特別賞を受賞。

2010年第16回ショパン国際ピアノコンクール（ワルシャワ）のファイナリスト。同コンクールでは、成熟した繊細な芸術性が、聴衆、音楽愛好家、そして審査員の心をつかみ、ショパンの音楽のすばらしい解釈者として賞賛された。

2012年、ダブリン国際ピアノコンクール優勝、シドニー国際ピアノコンクール第2位および聴衆賞を受賞。あわせて、共演したシドニー交響楽団のメンバーによって選出される最優秀協奏曲賞、最優秀リスト演奏賞、最優秀シューベルト演奏賞、最優秀ヴィルトゥオーゾ研究賞を受賞、最年少ファイナリストにも選ばれた。

モスクワ、サンクト・ペテルブルクといったロシア国内の主要都市のほか、ポーランド、ルーマニア、ハンガリー、チェコ、マレーシア、南アフリカ、オーストラリア、ドイツ、スイス、フランス、イタリア、アメリカ合衆国、日本など世界各地で数多くのリサイタルを開催。これまでシドニー交響楽団、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、京都市交響楽団、札幌交響楽団、山形交響楽団をはじめ主要オーケストラと共演。

CDも多数リリースしており2011年にCD Accordよりショパンとリストの作品を収めたアルバム、2012年にはショパン・インスティテュートよりショパン作品集を発売。同年10月にJVCビクターよりリリースされたベートーヴェン、ショパンほかを収めたアルバムは大きな反響を呼んだ。2014年1月に発売されたリストのピアノ・ソナタを収録したアルバムは、洗練された技巧と深い芸術性が高く評価されている。

柿沼 唯（作曲家） *Yui Kakinuma*

パデレフスキ：序曲 変ホ長調

我が国ではもっぱら、ショパンの楽譜「パデレフスキ版」でその名を知られるイグナツィ・ヤン・パデレフスキ（1860～1941）は、若き日には世界的なピアニストとして名を馳せ、後年はポーランドの首相兼外相として政治家の手腕も発揮した、ポーランドが世界に誇る音楽家の一人である。彼は作曲家としてもピアノ曲を中心に作品を残したが、ごく一部を除きこれまで演奏されることはほとんどなかった。近年では再評価が進み、特にピアノ曲は演奏会でも取り上げられるようになったが、数少ないオーケストラ作品が演奏されることは珍しい。今回演奏される「序曲」は、パデレフスキがベルリンに留学中の1884年に作曲した作品としてスコアが残されているが、生前に演奏された記録はなく、パデレフスキの没後50年にあたる1991年にようやく初演された。民謡風のメロディや快活なリズム、骨太のオーケストレーションなど、パデレフスキがチャイコフスキーやドヴォルザークといった偉大な国民楽派の作曲家に連なる音楽家であることを物語る1曲となっている。

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調 作品11

フレデリック・ショパン（1810～1849）の2曲のピアノ協奏曲は、いずれも彼が20歳前後の時期、つまり1829年と1830年に作曲された初期の作品である。ショパンが書いたオーケストラつきのピアノ作品はすべて、彼の創作初期に属するが、これらの作品には若きショパンのみずみずしい情感とピアニスティックな名技性があふれ、後年の作品に劣らぬ魅力を備えている。ショパンの2曲目の協奏曲にあたるこの「第1番」（出版された順序に従って、今日なおこの番号付けが通例となっている）は、1830年の秋、ショパンが故郷ポーランドを離れてパリに向かう際、その告別演奏会で自身の独奏により初演された。曲は何よりもピアニスティックな効果を発揮させるように書かれており、しばしば指摘されるようにオーケストラの書法は素朴なものにとどまっているが、ショパンならではの詩情豊かなピアノの繊細で香しい魅力がそのためにそこなわれることはない。

第1楽章アレグロ・マエストーソは、オーケストラによる長大な提示部に始まり、対照的な2つの楽節（雄々しい表情を持つ前半と表情豊かな旋律による後半）で構成されるホ短調の第1主題と、憧れるようなホ長調の第2主題がたっぷりと歌われた後、独奏ピアノの登場となる。

第2楽章ラルゲットは「ロマンツェ」と題されている。弱音器つきのヴァイオリンによって短い序奏が奏された後、ピアノがノクターン風の優雅なメロディを奏で始める。ショパンはこの音楽を「美しい春の月明かりの夜のような」と形容した。

第3楽章ヴィヴァーチェは、前楽章から切れ目なく続けて始まる。軽快で溌剌としたロンドで、その主題はポーランドの民族舞曲クラコヴィアク風の特徴をそなえている。途中、民謡調のエピソードなどを挿みながら、いっそう軽快かつ華やかに展開し、技巧を凝らしたコーダで絢爛と曲を閉じる。

ドヴォルザーク：交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界より」

1893年にニューヨークのカーネギー・ホールで初演されて以来、またたく間に世界中のオーケストラのレパートリーとして定着し、今日でも高い人気を誇るこの交響曲は、ドヴォルザークのもっとも円熟した作品のひとつであると同時に、その音楽性がもっとも魅力的な形で結実した作品である。

ボヘミアの片田舎に生まれたアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、決して恵まれていたとはいえない環境の中で作曲に専念した若き日を経て、ついにはその名声がヨーロッパはもとより、アメリカにまで及ぶ世界的作曲家となる。1892年、51歳のドヴォルザークはニューヨーク・ナショナル音楽院の院長として招かれ、アメリカに渡った。「新世界より」は、ほぼ3年にわたるこのアメリカ滞在中に書かれた記念すべき最初の作品であり、そこには、新大陸で出会った新鮮な感動が、祖国ボヘミアの土の上で培われた彼自身の言葉で、喜びをもって語られている。ドヴォルザークがこのアメリカ時代に作曲した他の作品といえば、弦楽四重奏曲「アメリカ」やチェロ協奏曲ロ短調があるが、いずれも彼の代表傑作に数えられている。

曲は4楽章構成。随所にネイティヴ・アメリカンの民謡や黒人霊歌に似たメロディが登場するが、それらはあくまで作曲家自身の創作によるものであり、この作品は「アメリカ大陸から故郷の人たちに贈る印象記である」とドヴォルザークは語っている。また、有名な第2楽章とスケルツォの第3楽章は、ロングフェローの叙事詩「ハイアウォーサの歌」に霊感を得て書かれたという。

第1楽章は、アダージョの序奏がチェロで瞑想的にうたわれ、アレグロ・モルトの主部を導く。ホルンの呈示する第1主題は、その民族的な風格が従来の交響曲の主題には前例を見ない独特のものである。五音音階と切分音を基調とした第2主題には、黒人霊歌の類型を見ることもできよう。

第2楽章は有名なラルゴ。のちに歌詞が付けられ、「家路」として知られるようになったメロディである。この楽章は「ハイアウォーサの歌」の中の「森の中の埋葬」という場面に霊感を得たものと言われているが、たしかに序奏の神秘的な響きは、そうした情景を想像させる。

第3楽章はスケルツォ（モルト・ヴィヴァーチェ）。ボヘミアの民族舞曲のリズムによる主題は、どこか哀愁を帯びている。「ハイアウォーサの歌」の中の場面、「先住民たちが踊る森の中の饗宴」にヒントを得て書かれたものだという。

第4楽章ではアレグロ・コン・フオーコの力強く溌剌とした第1主題が金管で奏され、次に優しい第2主題がなごやかな空気を漂わす。前3楽章の回想を織りまぜながら、最後に訪れるクライマックスは、この異色の作品を自信に満ちて飾っている。

「ピアノでポーランドを勝ちとった」パデレフスキ

関口　時正（東京外国語大学名誉教授）
Tokimasa Sekiguchi

鋼鉄の手を持つヴィルトゥオーゾは政治の道へ

1891年、パデレフスキはスタインウェイ社といわば専属スポンサー契約を交わしたピアニストとして、初めて渡米した。アメリカではスタインウェイ以外のピアノを弾かないと誓約させられ、膨大な数の演奏会をこなさざるを得なかった。11月17日ニューヨークで始まった半年間の興行中、パデレフスキは何と120回にも及ぶ公開演奏をし、名声を確立したのだが、その代償も高くついた。掌や腕の痛みが耐え難く、彼はピアノの改造を求めさえした。

前年ロンドンで彼の演奏を聴いたバーナード・ショーは「鋼鉄のピアノは鋼鉄の指を要求するということを、最高の教育者だったレシェティツキは知っていた。そして、ヴィークもクラクも夢想だにしなかった打鍵法をパデレフスキに教えた……」と、もはや（ブロウドウッド社製の）木製のピアノではない鋼鉄製のピアノの時代が到来したことをロンドン人は思い知らされたと綴っているが、パデレフスキはその変化を体現するシンボルだった。

獅子のような豊かな頭髪をふり乱しながら、いかにも天才藝術家というイメージにふさわしい風貌ながらも、鋼鉄の楽器を自在に操る鋼鉄の手を持つ新世紀のヴィルトゥオーゾとして、パデレフスキは文字通り世界を股にかけて公演活動をつづけるが、やがて心身ともに不調に陥り、1908年にはピアノに対する嫌悪さえ感じるようになっていた。そうこうするうちに第一次世界大戦が始まり、パデレフスキはその圧倒的な知名度と人脈を生かしてポーランド再生に尽力する政治家としての道を歩み始める。

ポーランド復活そして首相へ

1916年、アメリカの大統領に再選されたウッドロウ・ウィルソンを訪ね、ポーランド支援を懇請するパデレフスキを見た大統領夫人イーディスはこう記している――「直立し、祖国になり代わって熱弁をふるうパデレフスキ氏の顔を、私は死ぬまで忘れないだろう。それはあまりにも美しく、あまりにも悲劇的で、あまりにも深刻だった……　まるで私自身が、これまでポーランド人たちの経験してきたあらゆる苦悩と屈辱を目のあたりにした証人になったかのような気がした」。

今から100年前の1918年1月8日、ウィルソン合衆国大統領は、第13条にポーランドの再独立を明記した「14の原則」を提唱した。この講和原則こそが世界大戦を終わらせる大きな力となり、ポーランドを復活させたと言っていいだろう。パデレフスキは、同じ年の11月に晴れて国家主権を取り戻したポーランドの首相兼外相となり、やがてポーランドを代表してヴェルサイユ条約に調印する。彼とウィルソンが互いに敬愛し合う親友だったことはよく知られていて、ホワイトハウスのピアノも何十回となく弾いたパデレフスキは、「ピアノでポーランドを勝ちとった」と当時のポーランドの新聞雑誌は書き立てた。

1919年元日、パデレフスキを乗せてワルシャワに向かっていた列車は、歓迎に出た群衆によって止められ、ほとんど各駅停車を余儀なくされた。あくる2日、ワルシャワのホテル・ブリストルのバルコニーから、集まった群衆に向かってパデレフスキはこう呼びかけた――「私は高位高官や名声や栄誉を求めてやって来たのではない。尽くしたいと思って来たのです。それも、ひとつの党派に尽くすためではない。私はすべての党派を大切にしたい。しかし如何なる党派にも属す気はありません。党派はただひとつ――《ポーランド》であるべきです。そして私はその《ポーランド》という党派にのみ尽くし、死ぬまで尽くしたい」。

再興されたポーランド国内ではさまざまなイデオロギー、政治志向の潮流が激しくぶつかり合っていたが、パデレフスキは、人種、宗教、思想によって国民を差別することのない民主国家の建設を願っていた。ユダヤ人などの少数民族の平等も積極的に訴えた。しかし今でこそ一般的には肯定的に評価されて描かれるパデレフスキだが、当時のポーランド社会を構成する「多数」は彼のフリーメイソン的理想主義に拒否反応を示したようにも見える。首相の職にあることわずか1年、彼は辞職し、スイスへ去った。

音楽家として愛国者として

100年前、1世紀以上にわたる分割の後に復活したポーランド国家とパデレフスキの関係をふり返ってみると、確かに国内に帰って首相として成し遂げた業績もあるが、やはり国外にあって、中立的なイメージの強い音楽家として、しかし熱烈な愛国者として、欧米の多くの要人たちに祖国復興を訴えていた大戦中の功績は重要だったように思える。ウィルソンの妻が感動したパデレフスキの愛国心は付け焼刃でなかったことも確かで、思えば父ヤンも彼が生まれて3年後の一月蜂起（1863年）でロシア軍によって1年間投獄されていたし、十一月蜂起（1830年）で捕えられロシア奥地へ流刑に処された大学教授ズィグムント・ノヴィツキの娘として流刑先で生まれた母ポリクセナは、イグナツィを生んでわずか数ヶ月後に世を去っている。パデレフスキの幼い頃の家庭教師で、大きな感化を及ぼしたと思われるミハウ・バビンスキもまた十一月蜂起の参加者だった。そういう家に生まれ育った人間がポーランド復興を願う愛国者になるのは自然で、またそういう者の数も多かった。ただ、鋼鉄の楽器を弾きこなす鋼鉄の手と音楽の天分を持つ者は百万人に一人もいなかったのである。